

満員の電車で
揺られるとき
人は
ひとしく牛乳瓶の明るさ

川上 真央 東京都

「ひとしく牛乳瓶の明るさ」ということばのあたたかさ。その明るさは誰もにある幸いへの願いを表しているかのようで切なくも美しい。満員電車で、そうした情景を見つける書き手のやさしさが伝わってくる。

朝焼けを撮るので
少し遅れます

麓 天海 愛媛県

語り手は、その朝焼けをどうしても残しておかなければならなかったのだと思う。だから遅れてでも撮っておく必要があったのだろう。「少し遅れます」の「少し」からは、普段は理由もなく遅刻したりする人ではないことが伝わる。

多分、明日熱を出す
そんな感じで日々は続く

村上 翔哉 東京都

日々の閉塞感がありふれたことばで表現される。それが読み手に実感として伝わるのは、作品を構成することばが、語り手の実体験にもとづくものだからだろう。この作品から感じ

られる先行きの不透明感は、現在の社会における見通しの困難さを表しているかのようである。詩はまた時代を映すことばとしても機能する。

踏切を越えた自転車を弟かと思う

尾崎 愛 東京都

なぜ語り手が自転車を弟と思ったのかはわからない。けれどもその描写に否応なく惹かれる。それは、この作品で描かれる踏切の手前と向こう側に、どうにもならない断絶を感じるからだろう。弟は、もうこの世にいないのかもしれないと思うと切ない。

生者には影許されてしゃぼん玉

長谷川柊香 宮城県

生者にとっての影は許されるものとして描かれる。逆に、死者にとっての影は許されないものとしてかたちづくられる。生と死の対比が影という一語で表現される。許されるものとしての生。作品からは生きることの哀しみが伝わる。

花束を抱くとき樹木めくあばら

さいう 石川県

作品からジェンダーの痛みのようなものを感じるのは気のせいだろうか。花束を抱くときにすら感じてしまうあばらの乾きのようなもの。祝祭と痛苦がとなり合わせの肉体の不思議を思う。

褒められるための毎日冬董

吉沢 美香 宮城県

「褒められるための毎日」という一節で、叱られないように日々をやり過ごすのに汲々としている様子うかがえる。でも、そんな毎日にうんざりしているのではなく、むしろ愛着を持っているようにも見える。それは、冬董という美しい季語のもたらす効果の一つと言ってもいいと思う。

点滴に慣れて向日葵黒くなる

玻璃 愛媛県

闘病中なのだろうか。とある精神科医が、医者になって感じたことの一つに、病人に占める治らない人の割合の高さをあげていたのを思い出す。点滴に慣れるということ。向日葵が黒くなるということ。いずれも一定の時間の経過が感じられる。淡々とした語り口に多くの思いが詰まっていることを思う。

この世からこの世を引いて残る母

小里京子 北海道

この世からこの世を引けば、何もなくなるような気がする。けれども、そこに母は残っていると。認知症の母を描いたものだろうか。それとも療養中の母を描いたものだろうか。この世を遠く離れた何もないところに残る母は、何を思うのだろうか。

先生が好き 水仙の丘にいて

ムクロジ 群馬県

手放して先生が好きなんだと思う。だから水仙の丘なんだと思う。水仙の丘は、絶対に汚

されない場所で。そんな場所が誰にも一つくらいあるのかもしれない。

こすもすのはじっこに
おりかえしちてん

齊藤 栞 埼玉県

何かの折り返し地点がコスモスの端っこになっているというふうにも読めるし、コスモス自体の端っこに、折り返し地点というものがあるというふうにも読める。それはコスモスの端っこということばを選んだことで生まれる、読みの多様性でもある。個人的には、コスモス自体に、折り返し地点があったら面白いので、そっちの読みの方が好きだけれども。

一階の食堂がビストロになっても
ハイツ森野はハイツ森野だ

中井 望賀 東京都

口語だからこそできる表現。短歌風とか、芸術的といったものを、あえて捨てて作った作品じゃないかと思う。書いてあることは、ごくあたりまえのことだけれども、あたりまえだってそう簡単なものじゃないんだぞっていう主張が根底に流れている。こうした作品はもっとあってもいいし、読んでみたい。